

おわりに

今回の研究の目的はこれから起こると考えられる人口構造の変化、人口自体の減少、そして、現在模索されている都市のあり方を考えたとき、都市における鉄道が抱える問題点、および将来におけるそのあり方を探ることにありました。その結果、一応の結論をみることができましたが、読者の皆様はどのように、お感じになられたでしょうか。

この研究は今まで当研究会にて行われてきた、現状を分析し提言を行うというものではありませんでした。これから起こるであろう現象に対し、今までの政策や事業者の動き、あるいは人口推計などの予測データ等を用いることで、可能な限りで都市鉄道の将来について考察し、提言を行うことを目指すものでした。私たちが、現在を生きているとき、将来的に社会がどのようなものに変化し、そこにおける鉄道の役割もどのように変化するかを考えることは実感が湧かないこともあって、難しいことでした。また、まだ社会として模索中の段階である問題に対し、学生が半年程度の期間で結論をだすには、大きすぎるテーマだったかもしれません。

結局、今回の研究で見えてきたことをまとめてみると、現在のまま都市鉄道を運営していくことは、鉄道を取り巻く環境から様々な条件が重なり合い困難であるということでした。鉄道の利用者は、通勤ラッシュは緩和されつつありますが、さらなる快適さと利便性の高さを要求するでしょう。しかし、対する鉄道事業者は、もちろん経営努力に励むのは当然ですがそれでも利用客が減少することは予測されるので投資を抑制し、行うとしても慎重な判断が求められます。補助を行うべき公部門も厳しい財政難があって、これも抑制と慎重な判断が求められている局面です。そして、新たな社会において、計画されている都市づくりとその中における交通機関のあり方は、いまだに不明な点は多くあります。そこで、利用者・事業者・公部門で、都市鉄道に期待する、あるいは鉄道が果たすべき役割を勘案した上で、どの程度を誰が負担をして、どの水準を目指すか明確なビジョンを模索し、合意の上で鉄道は運営されていくべきだと考えられます。

このことが当てはまるのは鉄道だけではなく。つまり、これから訪れる社会においては、どの分野においても現在、存在するシステムの中で、どの部分を維持し、またはどの部分を縮小させていくかを、それに関わる人々の中で議論し、合意を形成することが求められる社会であるといえます。そして、私たちがこれから先、生きている間この問題から目を背けることはできないでしょう。そこで、一度鉄道という分野を主として、このことを考えてみようと思ったのが、この従来までの方向性とは異なる研究の動機でした。

現在、進みつつある社会の変化は、人口という切り口から見ると2100年には、現在の約半分程度になるという予測データがあります。つまり、もし、この予測どおりになると、現在からは全く考えることができない程、社会は別のものへ変わっていると思われれます。人口以外の要素でも本文中にも取り上げられた「多様化」というキーワードのもと、人々の生活や価値観にも大きな変化が現れるでしょう。その結果、現時点では近い未来ならともかく、数十年後や百年後の社会については、予想することはできますが、根拠のある予測は不可能であるといって差し支えないでしょう。そのため、私たちは、私たち自身や将来世代に対しどのような社会を築いていくか考えるために、これからも社会の趨勢に注意を払っていくことが必要であるといえるのではないのでしょうか。